「世界文学としての『苦海浄土』――石牟礼とウルフ」

榎本　眞理子

石牟礼道子の『苦海浄土』は水俣病とその裁判の記録と誤解されがちである。しかしこのテクストの真の価値は、「道子弁」による患者とその家族の思いの表出、往時の水俣の、山や海の美しい自然、そこに棲息する神々や、陸と海の生き物との調和に満ちた世界で生きることの本質が描き出されているところにある。そこには、この俗世界を支えているハレの世界、「もう一つのこの世」が描き出されている。精神を病んでどこへともなくさまよっていってしまう石牟礼の祖母は、孫とだけは心が通じ合った。祖母のことが分かる石牟礼は「この世と意識が反りかえってしまう」人であり、「悶え神」として水俣の苦しむ人々の思いをわがこととして書き記した。その世界では時間も空間も歪み、ねじれ、自他の境界も曖昧になる。そのようにして、石牟礼は Trinh T. Minh-ha の言う「優越者の立場に立たない語り」を実践している。

近代小説にはない石牟礼の独特の時間と空間の描き方は「交錯し重合する多次元的な時間」であり、「多次元空間」である。 ここにおいて石牟礼は、20世紀以来の実験的な作家と共通点を持つ。それら一見奇矯な時間・空間認識の方法は、実は文学のみの特権ではなく、我々が普通に生きて行

く日常の中で日々実践していることでもある。

「もだえ神」となった石牟礼は、様々な水俣病の犠牲者を描き続ける。解剖され、包帯で巻かれただけの娘の遺体を背負い、線路をとぼとぼと歩く母親など、患者とその家族の過酷な状況を描いたエピソードには事欠かない。その一方で、ご詠歌を練習するユーモラスなエピソードもある。これらから見えてくるのは自然と共に生きる人々の暮らしの豊かさ、庶民の知恵、謙虚さ、そしてユーモアセンスである。

失われた素朴な共同体は、様々な闇を抱え込んだものでもあり、理想的な友愛に満ちた共同体は元々幻想の共同体としてしか存在していない。ただ、チッソに普通の生活を奪われる前には「もうひとつのこの世」は現代よりはずっと近づきやすかったのは事実である。

石牟礼は冷静に現実を見つめながらも、苦しむ人たちに寄り添い、乗り移り乗り移られて書いている。それは岩岡の言う詩の力であり、多田富雄はそれを「姉性」と呼んだ。

石牟礼は生きることの実感を、それが近代と衝突してしまった事実を描きだそうとする。ここに語り得ぬものを語ろうとする営為の極北に至った一表現者のわざがある。

　言葉にならないものを言葉にしようとするとき、秩序だった言葉では間に合わなくなる。こうして石牟礼はウルフ、ガルシア・マルケスに近づく。生きることの痛さ、言葉の虚しさ、存在の裂け目の汀に生きる人間、それらゆえにこそ幻想を見てしまうこと、希望という病―それらを表現したのがこの『苦海浄土』である。

兆候と気配への感受性は『灯台へ』の随所にも見受けられる。表現への研ぎ澄まされた感覚、自然との一体感と命のはかなさの意識―それらはすべて石牟礼と極めてよく似ている。

一見非常にかけはなれた二人の作家の行き着いたところが、本質に於いて似通っている。二人は現代文明への疑問を共有している。また「正統的」なリアリズムではとらえきれない世界と人間を両者とも描き出そうとしている。それはこの二つの作品が、「世界文学」だということである。彼女たちの描き出す論理の支配以前の世界は、現代文明の中に生きる我々の中にも確実に存在している。

石牟礼の描き出す、水俣病発生以前ののどかな世界は、現実には存在しなかった世界である。素朴な村は嫉妬や世間の冷たい目に満ちた世界でもある。それでも春は来る。あり得たかもしれない「もうひとつのこの世」がこの上なく美しいのは、それが幻想であるという痛みを伴う明確な認識と、生きることの悲しみの感覚に根底を支えられているからである。その美しい世界を我々読者に示し示す石牟礼の営為こそが我々に救いと希望をもたらしてくれるのである。

（会員）